



創立1880年

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

Tel 03-6302-1960

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

発行所 公益財団法人

東京YMCA

発行人 菅谷 淳

東京YMCA

9

2019年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

YMCA夏の国際プログラム

国境越え 友情育てる



YMCAキッズワールドカップ in韓国

アジア各地の小学生がサッカーを通じて交流する「YMCAキッズワールドカップ in 韓国」が8月5～9日、ソウルで開催され、日本と韓国のほか香港、台湾から約80人の小学生が参加しました。

■交流の大切さ あらためて実感

東京YMCA国際委員 神保 伊和雄

連日のように日韓関係の悪化が報じられる中、出発前には治安も心配されましたが、現地ではまったく「反日感情」を感じることはありませんでした。私は大会終了後も1週間ほど韓国に滞在しましたが、タクシー運転手から「政治は政治。私たちは日本人を憎んではない」と声をかけられたり、売店でも「政府が勝手に騒いでいるだけ」と言われたりと、温かな市民の対応に安心しました。

ソウルYMCAのスタッフもいつもと変わらずに歓迎してくれた上、今年も現地企業の協賛を得て、子どもたちの滞在経費をも負担してくれました。サッカー以外にもパーティやゲーム大会など楽しいプログラムも用意され、子どもたちは不安な社会状況など気にせず思いっきり楽しむことができました。

毎年本当に不思議に思うのですが、子どもたちは言葉の違いも文化の違いも簡単に乗り越えて、ほんの数日で仲良くなっていきます。幼少期のこのような交流経験が良き思い出となり、政治に波風がたっても揺らぐことのない仲間意識を育て、未来の平和を築く力になっていくことを願ってやみません。

多くの不安の中で参加したキッズワールドカップ in 韓国でしたが、このような時世だからこそ必要な大会なのだと、改めて実感した次第です。

韓国で小学生80人 サッカー交流 言葉が違っても 仲良くなれる

アジア各地の小学生がサッカーを通じて交流する「YMCAキッズワールドカップ in 韓国」が8月5～9日、ソウルで開催され、日本と韓国のほか香港、台湾から約80人の小学生が参加しました。

例年子どもたちは共同で宿泊し、サッカーの他にウエルカムパーティーやレクリエーション、プール遊びやテーマパーク訪問などを通して交流を深めています。今年で10回目となりました。

今年、江東センターのサッカーチームに所属する小学生など8人が出場。昨年に続き3位に入賞しました。日韓関係が悪化する中で、韓国が主催する中で、子どもたちは韓国に平和な環境を保持し、子どもたちは



The Global Youth Event YMCA 175

ステージでは講演やパフォーマンスが次々と催され、会場には各国のフリスが並んだ



YMCAがロンドンで誕生して今年で175年を迎えたことを記念して

8月4日～7日、グローバル・ユースイベント「175」と「世界YMCA大都市会議（WUEN）」がロンドンで同時開催され、世界約100カ国から3000人を超える関係者が集まりました。会場は熱気にあふれ、175年間続いて来たYMCAのパワーとエネルギーを感じることができました。

世界YMCA同盟は国連のSDGs（持続可能な開発目標）を踏まえ、今後YMCAが取り組むべき4つのテーマとして「健康」「環境」「経済と雇用」「市民参画」を掲げていることから、連日このテーマに基づいた講演が行なわれ、YMCAほか国連やさまざまな団体で活躍中の方々が次々と登壇し、有益なスピーチを聞くことができました。ユースにとつては自分の将来を考えるためにも示唆に富んだ内容だったと思います。

毎日午後は選択プログラムの時間で、各国YMCAのユニークな活動紹介や、各種のプレゼン、ディスカッションのほか、バスケットボール、ドッジボール、クライミングなどのスポーツまで、1日に70を超えるプログラムが用意され、まるで大学の短期集中講習のようでありました。

国際部統括 松本 数実

「世界大都市会議」に参加した各YMCAの代表者たちは、チャイルズ・リードビーター氏による「A path to a preferable future（良い将来への道）」という3時間の講義を3日連続で受講することが必修とされました。今後「人」が必要になってくる職業とそうでない職業についての学びから始まり、YMCAの活動についてのディスカッションや、健全な組織運営のた

赤三角

「夕飯はカレーにしてください。アーメン」。一緒に祈っていた子どもたちが一斉に笑いました。小学2年の時に初めて

教会学校で、皆の前で祈りました。嫌がる私に先生が「思っていることを言葉にして」と言うので、素直に祈ったのですが、祈りの後、先生が怒って言いました「今、笑ったのは誰ですか？人の祈りを笑ってはいけません。中村君は神様に祈ったの。神様の笑い声が聞こえましたか？神様が笑わないのに皆が笑ったからおかしいでしょ。神様は私たちの祈りを全て聞いています。恥ずかしい祈りも、どうしようもない祈りも、全て笑わずに聞いています。だから私たちは安心して祈れるの。そして神様が良いと思った時に応えてくださるの」。先生は、私ではなく笑った子どもたちを真剣に怒っていました▼

YMCAは1844年に英国の12人の青年の祈りから始まりました。知恵も力もない青年の祈りを神様は聞いてくださり、175年経った今でも私たちは、その祈りに連なっています▼災害、貧困、差別、テロ。今、世界が混沌としています。それらに対して無力に聞こえる小さな祈りも神様は全て聞いてくださいます。（東京YMCA 評議員 中村基信）

= 1面より

世界YMCA175周年 新時代の課題

“若者のメンタルヘルス”に高い関心



香港YMCAから高校生9人と引率者2人が7月22日〜27日に来日し、日本の職業や文化を体験しました。多数の応募者の中から選ばれて来た高校生とあつて、独学で日本語を勉強していたり、日本の大学への留学準備をしていたりとモチベーションが高く、受け入れた東京YMCAもその期待に応えようと、各部署

香港の高校生 日本で職業など体験

その後実技の学びとして国際ホテル専門学校で「飲料サービス実務」の模擬実習を受講。レストランでのサービス方法を学びました。ホテル見学後は「AIをサービスにどのように取り入れますか？」等の質問もあり日本の観光業に関心を持った様子でした。その後ワイズメンズクラブの協力で本格的な



日本のワークショップの参加者たち。前列右から3人目が藤原聖帆さん



↑「ヒバクシャ国際署名」に協力するユースたち

もう一つご報告したいのは、私たち日本の参加者が開催したワークショップです。8月6日の原爆記念日にあわせて「過去から学び、私たちの未来を共につくる」と題して講義とディスカッションを行なったところ約20人が参加。広島出身の二井谷菜さんがブレゼン、私はファシリテーターとして台本作成などを務めました。原爆を知らない人にも伝わるよう、

ロンドンで8月、数百もの講義やワークショップが開催された「グローバル・ユースイベント175」。「健康」「市民参画」「経済・雇用」「環境」の4つが新時代の課題として取り上げられる中、主に「健康」のワークショップに参加した東京YMCA職員藤原聖帆さんに感想を聞きました。

東京YMCA職員

藤原 聖帆

マの1つであった「健康」です。「ユースのメンタルヘルス」「メンタル・ウェルネス」を取り上げるワークショップが数多く開催され、今後の健康・福祉分野の主要な課題として位置付けられていました。すでに欧米を中心に取り組みが始められており、私はカナダワークショップに参加しました。それによればメンタルヘルスは、「医師や服薬だけでなく、コミュニケーションでできるセラピーが大切」とのこと。不安や落ち込みといったメンタルな課題を受

原爆記念日に 核廃絶を考える

Mind・Body」の3つがより高度に融合し、プログラム面でもつながりを深めながら、次の時代へと発展しつつある。そんな流れを強く感じました。日本のYMCAでできることは何かを考えると共に、私自身も日々の関わりをより丁寧な紡いでいきたいと感じる機会となりました。

子育てコラム



学童クラブは「第2の家庭」

「おかえりなさい」。放課後、小学校から直接学童クラブに登室してくる子どもたちに、私たちスタッフがかかる挨拶の言葉です。学童クラブは、働くお父さん・お母さんに代わって、子どもたちの放課後の遊びや生活の場を提供し、健全な育成

を図っていく事業です。私たちは「学童クラブ」が、子どもたちにとっての「第2の家庭」になれるよう、プログラムの立案だけでなく、言葉かけにも気を配っています。だからこそ「おかえりなさい」です。

「おかえりなさい」に答えるように「ただいまー！」の元気な声。子どもたちは下駄箱に靴をしまい、ランドセルやカバンを自分の棚に入れます。宿題を終わらせてから遊び出します。しかし、簡単そうに思えるこの一連の行動が、子どもたちには大変な作業です。ましてや学校で嫌なことがあったら、

顔に戻って、行動も滑らかにすることがあります。「家庭」とは、日々の疲れを癒し、外で傷ついたり、痛めてしまった心を直せるところ。だからこそくつろげるし、心が休まる場所なんだと思います。

子どもたちにとっても、それは同じはず。お父さん・お母さんの優しさ、温かさには及びませんが、「第2の家庭」として、子どもたちの心と向き合える学童クラブをこれからも目指したいと思っています。

江東区東雲学童クラブ

主任 犬童さくら



総主事カフェ

東京YMCA総主事 菅谷 淳

総主事カフェにようこそ。9月になると思いつくことがあります。それは長男が5歳の時に遭遇した大きな交通事故です。今から25年前の1994年9月9日、次男の出産のために妻と子どもたち二人は妻の実家である新潟に帰っていました。実家の前で遊んでいた二人。道路にトンボがいて、それを取ろうと飛び出し長男は軽トラックにはねられました。妹が泣きながら実家に駆け込んできて事故が発覚。しかし9月9日は救急の日ということで救急車がパレードで出払っていて、現場に到着したのは通報から20分も経ってからでした。救急病院に運ばれてから東京YMCAの事務所に連絡が入りました。会議前に資料を整理して

いた私は妻の「涼（＝長男）が車にひかれた。危篤」の電話で目の前が真っ暗になり、すぐに新幹線で病院に急行しました。携帯電話もない時代、2時間の車中では息も心臓も止まりそうでした。「なんでこんなことに」いくら悔やんでもどうしようもない中、最寄りの駅からタクシーで病院に駆けつけました。ベッドにがんじがらめの長男は体中ダメージを受けて昏睡状態でした。担当の医師の説明は茫然自失の私にはほとんど聞こえてきません。妻は生まれたばかりの次男の世話もあるのに、私がつきつきりで長男の様子を見守ることにしました。

事故を起こした運転手は気が動転していて見舞いに来れない。あなたがたを耐えられない。あれから25年、長男は結婚し先月子どもが生まれしました。私たちにとって初孫です。おばあちゃんになった妻と話します。「特別な親孝行なんていらんよね、生きてさえてくれることが一番の親孝行だよ」。子どもたちがたくさん集まるYMCA、そのかけがえのない命を大切にすることが何よりも重要と、9月9日になるたびに心をあらたにしています。

■平和パネル展「サダコと折り鶴」

「戦争はしちゃだめだね」～来場者から折り鶴多数



戦後74年目を迎えた8月1日～9日、東陽町コミュニティーセンターロビーで、広島平和記念資料館からお借りした「サダコと折り鶴」ポスター展を開催しました。昨夏からスタートした平和展の3回目にあたります。「サダコ」とは、広島で2歳のときに黒い雨を浴びて被爆し、その後12歳で白血病を発病して亡くなった佐々木禎子さんのお話です。来場した子どもたちからは、「どうして原爆が落ちたの?」「禎子ちゃんかわいそう。戦争はしちゃだめだね」など感想が寄せられ、会場に設置した折り鶴コーナーは、平和を願った皆さんが折ったたくさんの折り鶴であふれました。

展示されているポスターの一枚に「原爆の子の像」設立のための募金運動を中心になって行った、当時の広島YMCA会員・河本一郎さんの姿を見つけました。また、この運動に主体的に関わった生徒の大半がYMCAの少年会員だったそうです。社会を動かしたYMCAの会員活動の一端も垣間見ることが出来、胸があたりくなりました。

(東陽町コミュニティーセンター 沖 利柯)

■東日本大震災 9年目の石巻で

社会体育・保育専門学校生が水泳指導

東日本大震災で被災した子どもたちを応援しようと、東京YMCA社会体育・保育専門学校は今夏もまた石巻小学校を訪問し、ボランティアで水泳指導を行ないました。この活動は震災直後から毎夏継続しており、今年で9年目。7月23～25日に10人、7月29～8月1日に5人の学生が指導にあたりましたが、雨で中止になった日が1日だけあったものの天候にも恵まれ、毎日午前午後2時間ずつ実施。多い時は一度に100人を超える小学生たちが水泳を楽しみました。学生たちも日ごろの学習の成果を発揮することができ、また小学生たちと交流が持て、充実したボランティア体験となりました。



石巻小学校は、復興の一環として近隣小学校と合併され、生徒数が増えたため、3年前にプールも改装しました。毎年欠かさずに参加してくれる子どもたちが、町の復興と共に成長していく姿に、訪れた私たちの方が励まされる思いがしました。

(社会体育・保育専門学校 佐治克彦)

■「YMCA夏まつり」

猛暑の中、熱気あふれる

毎年8月第4土曜日、東京YMCAの全センターの会員・職員が集まって模擬店などを出店する「夏まつり」。今年も33度の猛暑となった8月24日、約200人の会員関係者が集まり、焼き鳥や焼きとうもろこし、うどん、手作りギョーザ、かき氷など腕によりをかけた模擬店11店のほか、ヨーヨーや吹き矢など5つの子どもコーナーを出店。お楽しみ抽選会や「ザ・ドリームスクエア・ジャズ・オーケストラ」のバンド演奏もあり、会場の東陽町センターは終日、家族連れなどで賑わいました。

今年もまた、にほんご学院の留学生や清泉女子大学の学生、水泳クラスの小中学生(=写真)などがお手伝いとして大活躍。おかげさまで益金は約60万円となりました。青少年育成などYMCAの公益活動のために大切にに使わせていただきます。(広報室)



8月4～8日、韓国、インド、台湾などアジアのYMCAから73人が広島に集い「第41回広島YMCA国際青少年平和セミナー」が開催されました。東京YMCAからは高等学院生4人と卒業生1人、学生ボランティアリーダー、一般高校生の計7人が参加。平和祈念式典に参列し、「ヒバクシャ」の話を聞いたほか、平和記念資料館の見学、参加者同士の交流などを通して平和について考え、また全国から寄せられた折り鶴1万羽を「原爆の子の像」に捧げました。生徒の感想の一部を紹介します。

■原爆の怖さ、外国人にも伝えたい

坂本はな子 (高等学院)

被爆者の方のお話を聞いて、被爆の実態と原爆の恐ろしさが身に染みて分かった。被爆者の平均年齢が80歳を超えている今、日本人として、唯一の被爆国の人間として、戦争の悲惨さを伝えていかないといけないと思った。

原爆資料館はリニューアル後、被爆した時の様子やその後のことなどの展示が増えた気がした。また、外国人被爆者のことについて展示されているのに驚いた。広島を訪れる外国人にもこれらの展示で原爆について真剣に考えるようになってもらいたいと思った。

■友だちこそが 平和の原動力

吉岡海優 (一般参加)

私は今回、たくさんのことを学ぶことができました。一つ目は国の事情を気にせず、友だちを作ることです。本当にもしもお互いの国同士が最悪な関係になってしまっても、友だちがいるから戦う気になりません。そんな人がたくさんいたらもしかしたら平和に近づくのではないのでしょうか。(中略)三つ目は自国のことをもっと知ることです。他国の参加者は自分たちの国のことをよく知っていて、誇りに持っているように見えました。しかし私は自国のことを細かく人に説明できないと思います。これを機に日本のことをよく知りたいなと思いました。最後に準備してくださったみなさんにたくさん感謝したいと思います。

■被爆者の話に 怖さを実感

土屋和輝 (高等学院)

被爆者のお話が衝撃でした。今までネットなどで原爆の怖さや被害を知っていると思っていましたが、実際に体験されたことやその後の活動を聞き、鳥肌が立ちました。……原爆はとにかく悲しく、つらいものだと感じました。(中略)最後に、自分の成長としてとても良い平和セミナーでしたが、まだまだ自分の活動に満足できるものではありませんでした。しかし、満足できないということは、まだまだもらえるもの(学べるもの)が多いということだと思うので、また来年も参加したいと思う平和セミナーでした。

⇒1946年9月26日「毎日新聞」朝刊に掲載の東京YMCA会員募集の三行広告(実寸)



「三行広告」とは、新聞紙上に掲載される不動産や求人・求職広告の類で、記事内容は三行に凝縮される。今は一般紙上ではほぼ姿を消して、東京新聞紙上で時々見るばかりである。資料室が所蔵する『賛育会を育てた人びと』にこんな記事がある。「三行広告」の内

シリーズ
資料室の窓から(106)
結集につながった「三行広告」
本会元副総主事 齊藤 實

実を示す実例である。
【昭和4年11月15日の東京朝日新聞「朝日案内」欄に載った「人事広告」三件の一つである。「男児 生後廿日血性正體強健(注：生後20日の丈夫な男児)／慈愛深き方に差上げたし 浅草／馬道町八の七馬道通り産婆山下」。東京YMCAが関東大震災から復興し、新会館の竣工を目前に希望を高めていた同時期の世相を示す物悲しい記事であった。

さて、話は敗戦直後の東京YMCAに転ずる。1946(昭和21)年

「熱意ある仲間」を求めた「三行広告」を出した所以であった。これを見た独りの青年がその日、学校帰りに富士見町の東京YM

9月26日の毎日新聞朝刊に載った三行記事である。
【全人教育を標榜！ 毎夕(除土日) 講座、娯楽プロあり／YMCA会員募集 麹町区富士見町(飯田橋駅)／音楽講座―廿七日より―毎金五時―弘田竜太郎、津川主一。長く続いた戦争時代を敗戦という悲惨な形ではあったが終息できた日本は、新たな活力に満ちた青年の群れの奮起が必要であった。東京YMCAが

「熱意ある仲間」を求めた「三行広告」を出した。これを見た独りの青年がその日、学校帰りに富士見町の東京YM

後には「YMCA史学会」を結成し、90歳を越えた今もこの原稿を執筆している。まことに小さな三行広告が「彼ら私」にもたらした奇縁であった。

CAを訪ね、すぐに入会の手続きを済ませた。教員に会い始めたばかりのこの青年にとっては、キリスト教に関わる新たな視野での交友範囲を広げるまたとない契機となった。やがて彼は、仲間と志を整えて20歳のキリスト者会員を結集した。彼はそのグループに、キリスト・イエスの弟子中の最年少者ヨハネの名を冠した。「ヨハネ会」の誕生である。彼は転職して東京YMCA主事となり、リタイアした後には「YMCA史学会」を結成し、90歳を越えた今もこの原稿を執筆している。まことに小さな三行広告が「彼ら私」にもたらした奇縁であった。